

あやかし双子のお医者さん 一
ばけねこと鈴の記憶

椎名蓮月



富士見L文庫

目次

其の一	ばけねこと鈴の記憶
其の二	旧講堂の怪と見守りの犬

其の一 ばけねこと鈴の記憶

(莉莉)

呼び声がした。弟の、理人りひとの声だ。莉莉はあたりを見まわした。

(どこにいるの、理人)

莉莉が名を呼びながらあたりを見まわすと、何もなかった空間が、いつか見た景色に変わっていく。

海だ。

目の前に広がる砂浜は、子どもたちが行った七里しちりヶ浜がの海岸だ。海の方角に見える江えの島しまで気づいた。

(おばあちゃん！ 桜貝あったよ！)

その声に莉莉は驚いて振り返った。波打ち際に幼い女の子がしゃがみ込んでいる。その隣にはやはり幼い男の子が同じようにしてしゃがんでいた。

(あら、よかったわね)

ふたりの向こうから、日傘をさした女性が言った。日傘に隠れて顔は見えないが、海風で長いワンピースの裾が揺れていた。

(お母さんのおみやげにするから、もっとひろう！ 理人もさがすといいよ)
(うん)

理人、と呼ばれた少年がうなずいた。

これはいつか、祖母の家にあずけられていた夏の思い出だ。少女は自分で、理人と呼ばれた少年は弟。

祖母といっても、いま思えばまだそんなに歳を取っていなかったと思う。夏に好んで着ていた、淡い水色のワンピースの長い裾が海風に翻る。それがよく似合っていたのを莉莉は憶えている。

幼い自分が海岸線を駆け出した。しかし理人はその場に立ち上がったただけだった。それへ祖母が近づいていく。

(あの子と一緒にいるのは楽しい?)

祖母が囁くように、理人に問いかける。その声はあまりにもひそやかで、ともすれば海風の音にかき消されそうだった。

(……楽しいよ)

理人はふと、祖母を見上げた。その顔には、少しおとなびた表情が浮かんでいる。莉莉の見たことのない顔つきだった。

(でも、ときどき無茶をするから心配だ。できたら弟でなく兄か、同年がよかったのだけ)
(ど)

(それはむずかしい話ね。あの子が生まれてからいろいろわかったから)

(うん、それはわかってる。でも、おばあちゃん……貴女の力の影響は絶大だ。おかげで違和感はないよ)

(それならよかったわ。こんな大きな広がりのある術を使うのは、最初で最後でしょうしね)

ふたりの会話を、莉莉はぼかんとして聞いた。理人の口調は今と変わりはないが、幼いころにあんなふうにしやべるのを聞いたことはなかった。

(ところで……僕はかまわないけど、これはいつまでつづくの?)

(最初に言ったでしょう。あの子が自分の力に気づくまでよ)

(この術がきているかぎり、気づきそうにないけど)

(でも、わたしだっぴつまで生きていられるかわからないから、いつかは効力を失うわ。……それまで、よろしくね)

(そのあとは?)

理人が、祖母を見上げた。

日傘に隠れていた祖母の口もとが見える。微笑んでいた。

(あなたの好きなようにしていいのよ)

(だったら、僕、ずっとあの子と一緒にいたいな)

理人は無邪気な笑顔になった。

友だちの噂話を頼って速水莉莉が訪れた十六夜ビルは、どことなく古びて見えた。

「ここかあ……」

一階は、喫茶店だ。『エリユシオン』と飾り文字の看板がかかっている。カフェというより、昔からある喫茶店のようだ。格子状の窓硝子から中が見渡せる。カウンター席の他にテーブル席などが見えたが、莉莉の目的はこの店ではない。

莉莉は店の前を通って、ビルの入り口に向かった。

古いビルだ。店の脇にある入り口に扉はなく、その奥には上への階段が見えた。中へ入ると、入り口のすぐ脇に銀色の郵便箱が横並びで三つついている。名前を入れる部分には左端には看板の飾り文字と同じ書体で店名の記されたプレートが、真ん中には『桜木』と書かれた紙が入っている。右端には何も入っていない。なかった。

莉莉は階段を見上げた。日陰に入ったせいもあるだろうが、空気がひんやりと冷たい。

さっきまでかんかん照りの下にいたので、汗が首筋を流れているのがわかる。階段は薄暗かったが、何もいないようだった。莉莉はそれだけでホッとした。

学校で、教室の片隅に見えたくらいもやもやとしたものや、ここに来る途中の交差点で見た薄ぼんやりした人影もない。やはりあれは気のせいだったのだろうか。しかし教室で見たもやはともかく、事故が起きたばかりの交差点に人影が立っていたのにはさすがにこたえた。

だが、莉莉が友だちの噂話を頼ってここに来たのは、そんなふうに、突然、おかしなものが見え始めたからではなかった。

——理人。

弟のことを考えると、躊躇や怯みなどは消え失せてしまう。

「……うん」

莉莉は、持っていた薄い通学靴の持ち手をぎゅっと握りしめた。

今ほこしか、莉莉には助けを求める先はないのだ。

階段を上がると、廊下に出た。

廊下には扉が一枚しかない。その一枚しかない扉に、莉莉は歩み寄った。扉の上には横

書きの表札があり、『桜木晴嵐』と書かれている。ふと、莉莉は首をかしげた。その『晴』と『嵐』のあいだが少しあいているような気がしたのだ。

扉の脇にはインターホンがついている。莉莉は少しためらったが、それを押した。音がする。しばらく待ったが、返事はない。

莉莉がもう一度、そのボタンを押そうとしたときに、前触れもなく扉があいた。

「はい」

中から出てきたのは、どことなく不機嫌そうな顔をした男だった。莉莉は思わず一歩下がる。

男は背が高かった。扉の上のあたりに額がある。その顔を莉莉はまじまじと見た。歳は二十代の後半か、三十代くらいか。母親がたまに家に連れてくる事務所の若い連中に見た目がいい者ばかりだが、それと比較しても遜色ない造作をしているようだ。要するに、美形というやつだ。

ふわっとした柔らかかそうな前髪は少し長く、秀でた額を覆って瞼の上にかかっている。眠そうに細められた涼しげな目は、髪と同系色の淡い茶色だ。肌も白っぽいから、色素が薄いのだろうと莉莉は思った。左目のまなじりにはちいさなほくろがある。すっきり通った鼻梁、薄い唇は少しへの字。

その表情から相手があまり機嫌がよくないことを莉莉は察して内心で少しばかり怖じ気づいた。しかし、そんな自分を鼓舞するように、素早く考えを巡らせる。

夏休み直前の学校は午前みの授業で終わって、帰りの途中に寄ったのだ。早く帰って昼ごはんを食べたい。そんな時刻なのに、出てきた男が身につけているのはだらりとしたスウェットの上下だ。それがだらしなく見える。そんな男に怯む必要はない。莉莉はそう結論づけた。

「誰？ お客さん？」

しかし、不機嫌そうな男の後ろから顔を覗かせたもうひとり、そんな考えも遠ざかってしまふ。

莉莉はまばたいた。最初の男の肩口から覗くようにして現れた男は、顔だけは最初の男にそっくりだった。ただ、こちらはよく見ると、右側の目じりにほくろがある。それ以外は顔立ちも背格好もまるでコピーのようにそっくりだが、そのほくろのせいで左右反転コピーのようなだった。双子だろうか、と莉莉は思った。そうでなくとも兄弟だろう。でなければこんなにならずに済まない。身につけているのは白いシャツとズボンだったが、どちらも冬の装いに見えた。暑くないのだろうか。

「わあ、女子高校生だ」

そう言うのと、あとから出てきた男はにこにこした。同じ顔だが、最初に出てきた男の不機嫌そうなさまとはまったく異なっている。下がった眉、細められた目、ゆるく端のつり上がった口。そんなやさしげな表情に、莉莉は少しホッとした。最初の男の不機嫌さをさっ引いても余るほどに、あとから出てきた男は雰囲気はやわらかく、話を通じやすそうだ。どんなに美形でも無愛想な顔つきでは損をするよなあ、と莉莉は内心で思った。

「あの……お願いがあつて来ました。学校で聞いて……」

だが、莉莉は口に出してそれだけを言った。ここまで来て詳細を口にするのはためらわれたのは、相手がどうこうではなく、自分がこれから頼もうとしていることがあまりにも現実的でなさすぎたからだ。

「学校で」

不機嫌そうなほうが繰り返した。少しばかり顔つきが変わって、眠そうな感じはなくなっている。それでもやや陰しく見えるので、たぶん、そういう性格なのだろうと莉莉は判断した。

ということ、相当に気むずかしいにちがいない。話を聞いてくれるだろうか。不安が莉莉の胸をよぎる。

「入るといい」

しかし、不機嫌そうな男はぶっきらぼうに告げると、くるりと身を返した。もうひとり
は莉莉に安心させるように笑みかけつつも、それにつつこうとする。

莉莉はその場に立ちすくんだ。自分が何も言わないうちから、名乗りすらしていないの
に中に入れてくれるとは思わなかったのだ。

それ以外にもいろいろと不審なところがあって、いつもの精神状態だったらこのまま部
屋に入ることはしなかっただろう。だが、今の莉莉は藁にも縋りたい心地なのだ。それで
も莉莉は足を踏み出せなかった。

漏れ聞いた話では、ここに来れば現実的でない問題が解決する、というだけである。誰
がどう解決してくれるか、までは聞いていない。

「どうした」

莉莉がついてこないのに気づいて、ふたりは奥の扉の前で立ち止まった。

「あの、……なんのお願いか、聞かないんですか」

「女関先ですのような話ではないのだろう」

不機嫌そうな男は低い声で、しかし丁寧に告げた。息を詰めていた莉莉は、きょとんと
して男を見る。その傍らで、そっくりな男がにここした。

「べつに取って食ったりしない」

不機嫌そうな男はそう告げると、扉をあけた。

いろいろと気になる点はあるが、だからといってここで引き返しても事態は解決しない。
ほかにもうあてはないのだ。

莉莉は少しやけっぱちな気持ちになって、ふたりを追うようにして廊下を進んだ。

扉の向こうは、広い部屋だった。空調がきいているのか、室内はひんやりと涼しい。窓
にはブラインドが下げられているが、その隙間から入る光を跳ね返して床がぴかぴかして
いる。

莉莉はきょろきょろと室内を見まわした。

部屋のさらに奥には、扉のない出入り口がある。どうやらそちらは厨房の設備があるら
しい。白い冷蔵庫が壁に沿って置かれているのが見えた。

古びたビルの内装はやはり古そうで、壁は壁紙もなく、塗られた緑色がところどころは
げかかっている。床はくすんだ淡い茶色だ。

ブラインドの降りた窓ぎわには大きなデスクがあり、背後の頭上には丸い時計がかかっ
ていた。その下には月替わりのカレンダーがかかっている。

デスクの斜め後ろ、部屋の片隅には棚が置かれている。並んでいるのは本がほとんどだ

が、上のほうはフィギュアや地球儀や、彩りのきれいなステンドグラスのかさのランプ、装飾の彫られた小箱など、ちょっとレトロな雰囲気のあるものだった。

いったいこの部屋はなんなのだろう。莉莉はふしぎに思った。玄関で靴を脱がず土足で上がるのだから、一般的な生活の場ではあるまい。大きなデスクや棚も職場めいた雰囲気だ。何かの事務所のようにすらある。

しかし、大きなデスクの前に置かれたソファセットに座った男は事務所らしいこの部屋では浮いて見えるスウェット姿だ。足もとは素足に健康サンダル。場にそぐわないことこのうえない。

「そこに座りたまえ」

男はぞんざいに、自分の正面のソファを指した。莉莉はおずおずとソファに腰掛ける。ソファのあいだには低い卓たがあって、金属製のシンプルな灰皿と煙草が置かれていた。男は煙草の箱を取ると、取り出した一本をくわえて火をつけた。

「あ、煙草、いいか」

火をつけてからいいかも何もないものだ。それとも、尋ねるだけマシなのか。莉莉はなんと答えず、黙もくつてうなずいた。

男は煙草を深くすうと、今さらのように、あ、という顔をした。

「この時間だと、茶は出ない」

莉莉は漂ひらってきた煙を手で払った。

「かまわないです」

どう見ても起き抜けで不機嫌そうな男が、自分のような突然の来訪者をもてなす義理などないのは莉莉にもわかるので、特に不満はない。傍らに鞆たもとを置きながら、莉莉は改めて男を見た。男の後ろでは、そっくりな顔のもうひとりが呆あれたような顔をしている。

「女の子の前で喫煙するのはやめたほうがいいのに」

座ったほうの男はちらりとそちらに目をやったが、何も言わず、火をつけたばかりの煙草を、引き寄せた灰皿でひねり潰つぶした。それから莉莉を見て口をひらく。

「俺は桜木晴はるというんだが、君は」

「わたしは、速水、莉莉です」

「リリちゃんかあ。可愛い名前だね」

晴とそっくりなもうひとりが、にこにこする。仔猫こねこでも見るような顔つきだ。莉莉はなんとなく気恥きはずかしくなってきた。異性にこういう表情で注視されて平気でいられる女の子は少ないのではないか。しかし、予想に反して、彼は名乗ることなくただ微笑んで、莉莉を見ている。その態度に、莉莉はわずかな不自然さを感じた。

「ハヤミ・リリ、ね。その制服、高校生か」

「大和学院の高等科女子部かな」

「そうです」

晴につづいて、もうひとりが校名をあてたので莉莉はうなずいた。「五年生……あ、うち、高校二年のこと、五年生っていうんです」

「で、なんの用でここに来たんだ？」

晴は眠そうに問う。

「その……」

莉莉は言いよどんだ。しかしここまで来て何をためらう必要があるのかと考え直す。

「なんかわるいものに憑かれた子が、ここでとってもらったって聞いたんです」
うつぶきかけていた顔を上げた莉莉は、まっすぐに晴を見た。

晴は何も言わず、黙って莉莉を見返している。その傍らに立ったもうひとりが、何か言いたそうな顔をしたが、口をひらくことはなかった。

「わるいものに、憑かれた、か」

「その、昨日、聞いたんです……肝試しの前に、何か起きたらどうするの、って委員長が言ったら、ここに来ればいいって。十六夜ビルの二階に、お祓いをしてくれるひとがいる

って」

そこまで言って、莉莉は急速に恥ずかしくなってきた。高校生にもなって肝試しとか、何かに憑かれたかもしれないとか、妄想じみている。まともな大人なら取り合わないだろう。莉莉だって、へんなものが見える程度なら、気のせいにかたづけたに違いない。

だが、莉莉がここに来なければならなかった理由は、ほかにあるのだ。

「お祓い、か。僕たちにできるのは、それとちょっと違うんだけどな」

晴の後ろで、もうひとりが肩をすくめる。莉莉はそれをちらりと見た。目が合う。相手は何故か、きょとんとした顔になった。

「お祓いとは少し違うんだが、俺たち……俺ができるのは」

もうひとりの言葉を繰り返すように言いながら、晴は少しだけ眉を寄せた。「ところで、肝試しなど、無闇にするものではない。何かを引き寄せてしまうこともある」

晴の言葉は厳しく聞こえた。莉莉は、恥ずかしさと少しばかりの怒りを感じる。

「何かって、幽霊とかですか？ そんなのいるわけじゃないですか」

それを振り払うようにして告げると、晴は苦笑じみた表情を浮かべた。

「幽霊に限らない。ほかの、得体の知れないものも」

「幽霊がいるわけないっていうなら、なんでここに来たんだらうね」

もうひとり、くすくす笑った。見透かすような台詞に、莉莉はどきりとする。そうだ。幽霊なんていない。莉莉はじっと、名乗らない男を見つめた。すると、彼は戸惑ったような顔をした。どことなくそわそわする。

「その、ハルクン……」

彼は、晴の肩に手をかけた。だが晴は振り返らない。

「わたしは幽霊なんているとは思っていません」

莉莉は晴ではなく、彼に向かって言い放った。「でも、学校で聞いたんです。ここに来れば、憑いたわるいものもとってもらえるし、なくしたものも見つけてくれるって」

晴はきょとんとして、莉莉を見た。それから莉莉の視線を追って振り向く。

「幽霊なんて、いないって言ってるけど」

名乗らない男が、口ごもった。「ハルクン、その子……」

「君は、こいつがみえているのか？」

晴は莉莉に向き直ると、少し驚いたような顔をして、自分の肩に手をかけている男を指し示した。

「は？」

莉莉は思わず、晴の指先を見て、それから晴を見た。そっくりな似た顔だ。雰囲気がい

なるからか違って見えるものだと思っていたが、それが今は表情までうりふたつだ。呆気あつけに取られた顔つき。

「見えるって……」

「こいつがみえているのに、幽霊はいない、と言う」

晴はそこで、少しだけ口もとをほころばせた。「おかしな子だ」

「見えているも何も、いるんだから見えるんじゃないんですか」

何を言うんだと莉莉は思った。からかわれているのだろうか。莉莉は状況も忘れて少し苛立いらだった。もともと気の長いほうではない。だが、いつもはなんとかそれを抑えつけていられた。守らなければならぬ相手がいたからだ。

「僕、幽霊だよ。桜木嵐あらしっていうんだ。ハルクンとは双子の兄弟」